読書推進運動

No.686

★「絵本ワールド」各地で開催（２頁）
★全国SLA「学校読書調査」報告 発表（４頁）

定価60円　会員の購読料は会費の中に含まれる

公益社団法人
読書推進運動協議会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-32
出版クラブビル６階
TEL　03(5244)5270
FAX　03(5244)5271
発行人　佐々木　泰
編集人　片岡　伸子

年頭所感

追い風を受け、新たな読書推進元年に

公益社団法人 読書推進運動協議会副会長
日本出版販売株式会社 代表取締役社長
奥村景二（おくむらけいじ）

撮影：山岸伸

あけましておめでとうございます。平素より読書推進運動協議会の活動に多大なるご支援・ご協力を賜り、厚く御礼申しあげます。

昨年２０２４年の読進協の活動を一部取りあげますと、第66回こどもの読書週間（２０２４年４月23日～５月12日）における行事主催者数は２０２３年の１８９７を上回り、１９４４と直近の５年間でもっとも高い水準となりました。これはひとえに各都道府県の読書推進運動協議会のみなさま、関連する団体・個人のみなさまのご尽力の賜物であり、あらためてこの年頭所感の場をお借りし、感謝を申しあげたいと思います。

しかしながら、われわれがこうして読書普及に向けたさまざまな取り組みを進める一方で、文化庁が公表した「令和５年度 国語に関する意識調査」（調査期間：２０２４年１月16日～３月13日・調査対象：全国16歳以上の個人６０００人）では、１か月に何冊本を読むかという設問で「１冊も読まない」と回答した人が全体の62・６％、また読書量が以前と比べて減った／増えたかという設問では「減った」と回答した人が全体の69・１％（どちらの設問もn＝３５５９）にも上るという結果が出ました。

ふたつの回答とも前回の平成30年度調査から増加し、特に最初の設問の「１冊も読まない」の割合は15ポイント以上増えています。この結果は事実としてしっかりと受けとめる必要がありますが、これを好機と見ることもできるのではないでしょうか。短絡的な考え方と捉えられることと承知で申しあげますが、60％の人が本を読まないということは、すなわち60％の人が新たな読者になる可能性があるということです。その可能性に対していかにアプローチしていくか、私たちの意思と行動が重要です。

加えてわれわれ出版業界には強力な追い風も吹いています。みなさまご認識のとおりではありますが「街の本屋さんを元気にして、日本の文化を守る議員連盟」、そして齋藤健 前経済産業大臣のもと設置された「書店復興プロジェクトチーム」の活動をはじめ、政治・行政からも非常に前向きなご支援を賜っております。

団体名に「本屋・書店」とありますが、もちろん図書館も支援の対象となっています。たとえば文部科学省の取り組みとして、「図書館・学校図書館と地域の連携協働による読書の街づくり推進事業」を令和６年度補正予算として措置しています。昨年12月に行われた議連総会では、本事業で６か所×600万円の予算執行をもって、グッドプラクティスを創出していきたいとの発言もございました。

われわれと同じ想いで、政治・行政に関わるみなさまからも本や読書が持つ力を後押しいただけることに、心強さを感じています。しかし、頼るだけでは状況は好転していかないでしょう。先ほども申しあげたとおり、当事者であるわれわれ業界の強い意思と行動があってこそ、この難局を乗り越えられると考えます。

追い風を受け、読書推進運動協議会のみなさまと一丸となり、意思も新たに本年も活動に邁進してまいります。

■読書推進運動委員会 全体事業委員会

今年度事業を振りかえり、来年度の展望を探る

公益社団法人　読書推進運動協議会の事業である、2025年度春の「第67回 こどもの読書週間」および秋の「第79回 読書週間」の標語選定事業委員会が2024年12月3日、18名の委員が出席により開催された。事前に電子メールによる投票をお願いし、その結果をもとに、さらに投票と議論を行った。あわせて1500点を超える応募のなかから、それぞれ入選作が決定した（詳しくは8ページを参照）。

続いて2024年度 全体事業委員会では、事務局から以下の2024年度事業報告などが行われた。

4月23日～5月12日に行われた「第66回 こどもの読書週間」の標語は「ひらいてワクワク めくってドキドキ」。ポスターは、絵本に関わる多くの賞を受賞し、注目のユニット「ザ・キャビンカンパニー」の二度目となる描き下ろしで制作、4万9000部を配布。行事主催者数は1944で昨年を上回った。

10月27日～11月9日の「第78回 読書週間」の標語は「この一行に逢いにきた」。ポスター5万3000部を配布。「全国優良読書グループ表彰」は37団体に賞状・副賞を贈呈した。

7月の「敬老の日読書のすすめ」12月の「若い人に贈る読書のすすめ」リーフレット、11月7日に贈呈式を行った第54回「野間読書推進賞」と、今年度あらたに取り組んだ協議会のX、春秋二度のクラウドファンディングについても報告。最後に翌年度の事業とそのスケジュールを確認、閉会した。

2024年の「こどもの読書週間」「読種週間」ポスターはどちらも話題に！

■「絵本ワールド」各地で開催

各会場の特性、個性があふれた企画がいっぱい！

「絵本ワールドinわかやま2024」が、2024年11月9日(土)、10日(日)、和歌山県有田川町の有田川町地域交流センター（ALEC）で開催された。会場は、JR西日本の特急「くろしお」が停車する藤並駅が最寄り。ミカン畑なども見られる、紀州の田園風景がひろがるエリアの新しく広々としたスペースだ。

絵本の販売のほか、真珠まりこさんの「もったいないばあさんのおはなし会」や、田島征三さんの講演会と原画展、多くの絵本作家によるトークセッションやワークショップなど、もりだくさんのコンテンツとなった。また、有田川町では公募による「絵本コンクール」を開催しており、11月9日にはその授賞式が行われた。第12回の今回は、最優秀賞のnanohanaさんの『ボタンのたん』ほか、7作品に賞が授与された。

同じく11月9日(土)、10日(日)には、千葉県東金市の城西国際大学千葉東金キャンパスD棟（福祉総合学科棟）を会場として「絵本ワールドinとうがね2024」がJIU Festivalの一環として開催された。こちらでは新刊を中心とした絵本児童書の展示と大学特別価格（5%引き）での販売を行なった。また、ワークショップとして、11月10日には仕掛け絵本作家やまはたマリーさんの「クリスマスカードを作ろう！」を実施。また期間中、福祉総合学科の学生による「おはなし会」を行なった。福祉を学ぶ大学生たちによるてづくりのコンテンツが多く企画され、会場を訪れた親子連れの歓声が響いていた。

過去の「絵本コンクール」受賞作で出版されたものを紹介（わかやま）

そして12月1日(日)には、東京都町田市の東京家政学院大学町田キャンパスで「絵本ワールドinまちだ2024」が初開催。こちらも大学生が中心のイベントだ。東京西部の丘陵地帯に位置する緑豊かなキャンパスを会場に、絵本の販売、絵本作家 岡田千晶さんのトーク、ぬり絵、サイン会、シゲリカツヒコさんのワークショップ、サイン会などにぎやかな内容となった。

晩秋から初冬に向かう季節、各地の「絵本ワールド」では開催地の特性と、実行委員会の性格により、それぞれユニークなイベントとなり、子どもたちが絵本を直接手にとって好奇心で目をきらきらさせる姿がみられた。

東金キャンパスの福祉総合学科の学生たちが大活躍！（とうがね）

■JBBY50周年記念イベント

記念の年にふさわしい国際シンポジウムを開催

一般社団法人 日本国際児童図書評議会（JBBY）は、2024年11月16日(土)、出版クラブビル（東京都千代田区）にて「JBBY50周年記念国際シンポジウム『いま、子どもの本は世界とどうかかわるのか』を開催した。

シンポジウムに先立ち、デイヴィッド・アーモンドさん（イギリス）、ジャクリーン・ウッドソンさん（アメリカ）、クォンユンドクさん（韓国）など、世界中で活躍する12人の子どもの本の作家・画家による、テーマによせたビデオメッセージが上映された。

パネリストは、岩瀬成子さん(作家)、長倉洋海さん（写真家）、さくまゆみこさん（翻訳家）の3名。

岩瀬さんは「目の前の現実以外の世界を示してくれる、本・物語が私を守る壁になってくれた」と自身の子ども時代をふり返り、「子どもの本が普及しているのは、比較的裕福な国。ほんとうに物語を必要としている子どもに届いているのか。本の形にこだわらず、口承や歌などで物語を聴く大切さも考えたい」と述べた。長倉さんは自身が撮影した世界の子どもたちの写真を紹介しながら、「(被写体の)子どもの気持ちがわかるわけではないが、目の前の子どもを作ったもの、包んでいるものを撮りたい。手をつなぎ、肌ざわりや体温を共有することで、つながっていける」と撮影時の思いを紹介した。さくまさんは「子どもにとって、本は今ここにない世界を見る窓。いろいろな窓があってほしいから、日本の作家が書けるテーマ以外の窓を探して、翻訳している」と語った。また、「子どもの遊びや喜びが、消費するものになってしまっている。ただボーっとするだけの時間がない」「世界は子どもにとって、本来すばらしいものであるはず。その世界を破壊するものへの反対する力に、子どもの本がなるという希望に勇気をもらった」など、現状への懸念と未来への希望も語られた。

JBBYは12月15日(日)にオンラインで、JBBY会員の絵本作家による「アート大喜利＆オンラインリレートーク」も開催。

「アート大喜利」では、石川えりこさん、舘野鴻さん、垂石眞子さん、とよたかずひこさん、降矢ななさん、堀川理万子さんが、「今食べたいもの」「50年前の自分」などのお題に即興でイラストを書いて披露。1分～2分という短時間で仕上がったイラストの見事さに、チャット欄には驚きと賞賛の声が寄せられた。

「オンラインリレートーク」には、きむらゆういちさん、渋谷純子さん、田島征三さん、田中清代さん、中辻悦子さんが、最新作や現在とりかかっている作品の一部を紹介。また、カナダからシドニー・スミスさんも特別参加し、創立50周年記念イベントの最後を締めくくった。

シンポジウムは３月31日までアーカイブ配信中（有料、視聴方法はhttps://jbby.org/news/domes-news/post-22104を参照）

■「世界KAMISHIBAIの日」

平和と共感を紙芝居で世界へ広げる

2024年12月7日(土)、童心社KAMISHIBAI HALL（東京都文京区）にて、「第7回 世界KAMISHIBAIの日 in Tokyo（主催＝紙芝居文化の会）が開催された。

このイベントは、12月7日が「世界KAMISHIBAIの日」に制定されたことを記念して、毎年開催されており、会場と世界中の参加者をオンラインでつないで行われる。今年も、日本全国、およびマレーシア、インド、ドイツ、中国、台湾などから約70名がオンラインで参加した。

野坂悦子さんと賈珊さんによる日本語と中国語でのかけあい紙芝居上演

会場では、長野ヒデ子さんの『ころころ じゃっぽーん』を皮切りに、アラビア語、チベット語を交えた手づくり紙芝居などが次々と上演された。まついのりこさんの『よいしょよいしょ』を、会場で野坂悦子さんが日本語で、オンラインで中国から賈珊さんが中国語で、交互に上演するなど、ハイブリッド形式ならではの試みもあった。

また、マレーシアからは子どもたちも一緒に参加、インドからは仕掛けのつまった手作り紙芝居の上演、ドイツからは作家や教師などが参加している紙芝居サロンの報告があり、紙芝居が国境を越えて楽しまれている様子が、うかがえた。

会の終盤では、平和をテーマにした松井エイコさんの『二度と』を恵泉女学園大学教授の岩佐玲子さんが上演。上演後には、現在、学生たちがこの作品を「平和の語り部」として地域の中学校での出前授業で紹介していると報告された。

■第69回 学校読書調査

読んだ冊数の低下、不読率の上昇も「本を読むことは好き」の回答

2024年11月、公益社団法人全国学校図書館協議会（全国SLA）は、「第69回 学校読書調査報告」を発表した。

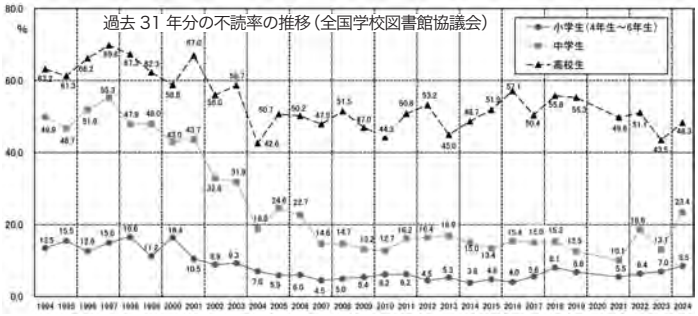
今回の調査は2024年6月に実施。調査対象は、全国の小学校46校、中学校40校、高校46校で、回答者数は小学生（4～6年生）3308名、中学生（1～3年生）3496名、高校生（1～3年生）4604名だった。

調査項目「あなたは5月1か月の間に、本を何冊ぐらい読みましたか？」の回答の平均は、小学生＝13・8冊（前年12・6冊）、中学生＝4.1冊（前年5.5冊）、高校生1.7冊（前年1.9冊）。小学生は過去最高値だが、中・高校生は減少し、特に中学生の減少数が大きい。

また、「1か月の間に1冊も読まなかった」人の割合＝不読率は、小学生＝8.5％（前年7.0％）、中学生＝23・4％（前年13・1％）、高校生＝48・3％（前年43・5％）と、すべての校種で上昇している。

ただし、「本を読むことは好きか」との問いに「好き」「どちらかといえば好き」と答えた割合もすべての校種で高く、今後、不読率が下がることも期待できる。

すべての調査項目の集計結果と考察は、全国SLAの機関誌『学校図書館』第889号（2024年11月号）に掲載されている。



■絵本専門士 認定10周年

10年の節目に絵本専門士のさらなる普及を目指す

2024年11月30日(土)・12月1日(日)、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）において、「絵本専門士10周年記念事業（主催＝同企画・運営委員会／絵本専門士委員会／独立行政法人 国立青少年教育振興機構）」が開催された。

第1期絵本専門士が認定されてから10年、2024年11月現在、全国各地で637名の絵本専門士が活躍している。さらなる普及を目指しての記念事業が企画された。

30日は「これまでの10年、これからの10年」。シンポジウム「絵本専門士のこれまでとこれから」には、絵本専門士委員会委員を務めた肥田美代子さん、柳田邦男さん、現委員の秋田喜代美さん、鈴木みゆきさんが登壇。基調講演「絵本を広げるPLAY! MUSEUMの展覧会」の講師は草刈大介さん（ブルーシープ代表）。「絵とことば」がテーマの、「ありそうでない」美術館＝PLAY! MUSEUMと絵本の可能性を紹介した。

1日は「深める絵本専門士、広める絵本専門士」。絵本専門士による講演会は、第4期の杉上佐智枝さん（日本テレビホールディングス㈱）の「絵本専門士×テレビ局員の5年間」と、第7期の石川直樹さん（写真家）の「旅／写真／絵本」の2本立て。また、会場には、全国の絵本専門士による展示ブースが設置され、参加者が実践報告を交わす場面も見られた。

■絵本図書館ネットワーク

恒例のシンポジウムに加え新たなイベントも開催

絵本を通じた人づくり、地域づくりを目指す、絵本図書館ネットワーク（佐賀県武雄市）は、2024年12月14日(土)にパシフィコ横浜（神奈川県横浜市）で「絵本から聞こえてくる物語」を、15日(日)に東京国際フォーラム会議棟（東京都千代田区）で「第6回 子ども読書活動推進に関するシンポジウム」をオンライン併用で開催した。

「絵本から聞こえてくる物語」では、絵本作家 いせひでこさんによる自作『ピアノ』（偕成社）をモチーフとした講演「音楽という手紙～ラの音がならないトイピアノを弾いた子どもの物語～」と、音楽と絵本の読み語りグループSORAによるいせさんの「絵本ライブ」が行われた。

6回目となった「子どもの読書活動推進に関するシンポジウム」では、「子どもの読書活動推進を支える活動の現状と可能性について」、野口武悟さん（専修大学文学部教授）をコーディネーターに、設楽敬一さん（全国学校図書館協議会前理事長）、生田美秋さん（高志の国文学館事業部長）、福田孝子さん（三郷市読書活動アドバイザー）、中尾玲一さん（城西国際大学メディア学部准教授）、上甲知子さん（読み聞かせ講師）が、意見交換。その後、柳田邦男さん（ノンフィクション作家）の講演「生きる力への気づき～子どもが心を見つめる時～」、参加者による情報交流会が行われた。

■伊藤忠記念財団 設立50周年

子どもと本をつなぐ楽しさを紹介する記念展示とイベントを企画

2024年9月に設立50周年を迎えた公益財団法人 伊藤忠記念財団が、2025年1月から3月にかけて、東京都内2か所で記念展示を開催する。

展示内容は、同財団50年の歩み、子ども文庫助成事業と電子図書普及事業の紹介、同財団が運営していた「東京小中学生センター」の活動紹介など。同財団が選んだ「子どもの本100冊」リスト掲載書とマルチメディアDAISY「わいわい文庫」も閲覧ができる。それぞれの会場で、期間中に関連イベントも開催される。

①1月10日㈮～2月2日㈰「伊藤忠記念財団50年のあゆみ～すべての子どもたちに読書の喜びを～」

会場＝銀座教文館9階ナルニア国店内ナルニアホール（東京都中央区）

関連イベント

・1月22日「子ども文庫の今とこれから」…東京子ども図書館と協働制作中の「文庫の手引き」と、子ども文庫助成事業で出会った文庫のエピソードなどを紹介

②2月5日㈬～3月2日㈰「伊藤忠記念財団50周年企画展示「未来につなぐ子どもの読書」

会場＝ITOCHU SDGs STUDIO GALLERY（東京都港区）

関連イベント

・2月9日㈰「しゅわよみ！～手話による絵本の読み語り」講師：特定非営利活動法人しゅわえもん

・2月23日㈰「自分だけの『みーせーて絵本』をつくってみよう！」講師：スギヤマカナヨさん（絵本作家）

・2月24日㈪祝「さわって楽しむ宇宙～インクルーシブ天文のススメ」講師：嶺重慎さん（京都大学名誉教授）

・3月2日㈰「東京子ども図書館おはなしのじかん」語り手：東京子ども図書館スタッフ

イベントの参加は事前申し込みが必要となっている。

× × ×

また、伊藤忠記念財団は、全国の公共図書館などと協力して、「読書バリアフリー研修会」を実施している。対象は、読みに困難さがある子どもたちに関わる方々（図書館員、学校教職員、読書バリアフリーに関心のある方）。読書支援に必要な知識や方法を広く周知することが目的。

同財団はホームページ内の「WEBセミナー」にて、読書バリアフリー研究会の講座の一部を動画で発信している。現在は「公共図書館の障害者サービス」「国際子ども図書館の読書バリアフリーの取組」などが視聴可能。

記念展示や、読書バリアフリー研究会の詳細は、伊藤忠記念財団までお問いあわせください。

○伊藤忠記念財団ホームページ
https://www.itc-zaidan.or.jp/

・WEBセミナー
https://www.itc-zaidan.or.jp/summary/ebook/seminar/

50周年記念展示のチラシ

■日本図書館協会が要望書

図書館職員の継続した雇用を自治体へ訴える

2024年12月6日㈮、公益社団法人 日本図書館協会（日図協）は、県知事会・市長会・町村長会に対し、要望書「公共図書館、学校図書館で働く会計年度任用職員の継続雇用についてのお願い」を提出したと発表した。

日図協は、公共図書館は市民の生活にとって、なくてはならぬもの。小中高校に設置されている学校図書館は児童生徒の成長にとって不可欠。そこに働く図書館職員には司書としての資格の上に経験によって培われたさまざまな知識と対応力が求められ、そのような人材は地域や自治体にとっての貴重な財産である。しかし、本来正規雇用であるべ公共図書館職員の4割以上、公立の学校図書館職員の9割近くが会計年度任用職員であると、地域における図書館職員の必要性と待遇の現状を説明。

また、2018年に発表された総務省の会計年度任用職員制度についてのマニュアルに、「平等取扱いの原則及び成績主義を踏まえ、公募によらず従前の勤務実績に基づく能力の実証により再度の任用を行うことができるのは原則2回まで」と例示されているため、マニュアル発行から3年目を迎えた1昨年度には、勤務実績を考慮しない公募の自治体では、経験を積んだ職員の雇用が打ち切られる事態が発生。5年目の今年度、さらに3年の2巡目を迎える来年度にも同様のことが予想されると懸念し、以下の3点を要望している。

1．公共図書館・学校図書館の維持・充実・発展のためには、そこで働く職員の安定、継続した雇用が不可欠です。総務省マニュアルでは、「募集に当たって、任用の回数や年数の制限を設けることは避けるべき」とされています。

2．図書館職員の任用に当たっては、図書館職場で培われた知識と経験によって評価されることが望ましいと考えます。

3．既に十分な勤務実績を積んでいる職員については、期限を区切っての雇用ではなく、かつ公募によらない雇用更新任用を求めます。

優良読書グループの歩み（1）

2024年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。（順不同）

よみきかせの会☆星の子

代表者　鍛冶　惠子

北海道白糠郡白糠町

〈推薦〉北海道読書推進運動協議会

町内の主婦で立ちあげた読み聞かせグループ「スイミーの会」を母体に、教育委員会が開催した「お母さんの読み聞かせ教室」の参加者が加わり、1983年にサークル「星の子文庫」を発足。その後、1994年に現グループに改称し、現在にいたります。

大人なって、幼いころに読んでもらった絵本に出会い、ページをめくると読んでもらった人の声が聞こえてくる。そんな体験を子どもたちに！と願いをこめて、星の子の活動を続けてきました。

1992年に作成された、白糠ふるさと絵本『ぼくはたいようのて』は、商工会青年部と一緒に絵本製作の企画から参加させていただき、とても思い入れのある絵本となりました。この絵本は、定期的に実施する読み聞かせ会などでこれまで多くの子どもたちに読み聞かせしてきたほか、町内の4か月児にボランティアの作成した名前入りのバッグと一緒にプレゼントされており、親子が一緒に本を開くきっかけづくりとなっています。

町では、2024年から、小学1年生に3冊の絵本を読み聞かせたなかから好きな絵本を選んでもらい1冊プレゼントする、ブックサード事業をスタートしました。星の子は、読む絵本の選定と、読み聞かせをするお手伝いをさせていただいています。

このほか、子育て支援センター、児童館、学校での朝読書、ケアホームなどで定期的に読み聞かせをして、多くの町民の方に喜んでもらっています。2023年には、情操教育指導者のピアノと歌唱とコラボレーションし、新たな読み聞かせをすることができ、楽しい思い出となりました。

活動を始めた当初は、自分の家にある絵本をおのおのが持ちよって読み聞かせをしていましたが、近年は、本の充実に力を入れている町の公民館図書室や学校図書館を積極的に活用するようにしています。だれかに読んでもらった絵本をもう一度、身近な場所で手にとることができる環境づくりは、子どもたちが絵本に親しむための体験として重要なことだと思っています。

今回の受賞を励みに、星の子の活動を楽しみにしてくれる子どもたち、いつも支えてくれた教育委員会のみなさま、そして、41年間ずーっと応援してくれたメンバーとそれぞれの家族をあわせた〝チーム星の子〟全員に感謝して、1年でも永く白糠町のみなさまにたくさんの絵本をお届けしていきたいです。

41年のたゆまぬ活動は白糠町にしっかり根付いています

やまばと読書会

代表者　柿木　鞆子

埼玉県比企郡鳩山町

〈推薦〉埼玉県読書推進運動協議会

故 安藤とくさんが旧鳩山地区の本好きな人たちを集めて「読書サークル」を作り、読書を楽しんでいらっしゃいました。その後、安藤さんを会長に「やまばと読書会」が発足しました。もう43年になります。

今は会員が10名弱です。「読書サークル」のころの会員はほとんど、鬼籍に入られています。私は「やまばと読書会」が発足したころ、会員になりました。

長年お世話になっております、鳩山町立図書館にも歴史がありますが、鳩山ニュータウンに1989年8月に新図書館が開館しました。

1990年には図書の貸出数が10万冊となり、町民ひとりあたりの貸出冊数が埼玉県第1位（貸出数、ひとり7・49冊）となったこともあります。1991年にはひとり12・06冊で全国1位になりました。（人口1万5000人以上の町村立図書館部門、日本図書館協会発表）

こうして図書館の利用者が多いなか、2022年3月から2021年3月までコロナの流行で貸出制限がありました。現在は通常どおりに貸出されています。

コロナの流行以前には、「やまばと読書会」会員が年1回図書館に集まり、年6冊分の本を決めて図書館に用意してもらいました。

しかし、コロナの流行にて集会が禁止になりましたので、ここ3年ほど、図書館にお願いして本を選んでもらっていました。でも近ごろ、会員から集まって本を私たちで選ぼう、意見交換しよう、という話が出てきました。2025年2月には、久しぶりに会員のみなさんとお逢いして本を選びたいと、ワクワクしています。

これからも図書館のみなさまのお世話になりながら、読書会を続けていきます。

むかわ図書館桜さくらの会

代表者　小池まき子

山梨県北杜市

〈推薦〉
山梨県公共図書館協会
読書推進研究部会

「むかわ図書館桜さくらの会」は、地域の図書館の活性化のため、また、図書館の楽しさを子どもたちに伝えたいという思いから、２０１０年に結成されたボランティアグループです。

今まで、読み聞かせや民話、郷土史の講演会、音楽コンサートなど、子どもから大人まで楽しめるさまざまなイベントを企画し実施してきました。現在12名のメンバーが「人と人」「子どもと本」「子どもと図書館」をつなぐため、図書館と連携を図りながら活動しています。

コロナ禍前まで９年継続して行ってきたハロウィンフェスティバル(地域住民のクラフト市、ワークショップ、飲食の出店、ミニおはなしシアター、ＡＬＴによる英語の絵本の読み聞かせやゲーム、仮装コンテストなど)のイベントでは、異文化を学ぶとともに、図書館が地域交流の場となりました。近年では、児童作家を招いてのおはなし会や、落語、人形劇など、多様な内容も組み入れた活動をしています。

むかわ図書館は、児童館や放課後児童クラブ、子育て支援センターとの複合施設にあることから、子どもたちの読書活動支援に力を入れています。

毎年夏休み中に行うイベント「読書の楽しさを見つけよう!」では、元教員のメンバーを中心に、読み聞かせだけでなく読書感想文の書き方や本の選び方など、子どもたちに「読む」「書く」「聞く」「話す」のアドバイスを行っています。

２０１９年からは、読書好きな子どもを育てたいという思いでアニマシオンを導入し、低学年からでも楽しめるように工夫をこらしながら、子どもたちがはば広くいろいろな本とふれあえる機会を作っています。

さまざまな活動を通じ、子どもたちが目を輝かせて絵本を見る姿や、自分の考えたこと、感じたことなどを聞く姿にふれ、あらためて子どもたちの想像力や感性の豊かさを感じ、子どもたちから学ぶことがたくさんあることに気づかされます。

今後は「読み聞かせ」の勉強会を行い、乳幼児から小学生を対象にしたおはなし会ができるよう、個々のスキルを高めて活動の場を広げていきたいと考えています。

今回の受賞を励みに、今後も自分たちができる範囲で無理なく、そしてなによりも楽しく活動を続けていきたいと思っています。

多彩なプログラムで子どもたちに読書の楽しみを

図書館ボランティア おはなしあのね

代表者　工藤　貴子

大分県宇佐市

〈推薦〉
大分県読書推進運動協議会

２００１年、宇佐市民図書館主催の読み聞かせボランティアの研修会が開催され、約16名が受講。その後半年間、月に1～2回の研修が行われました。

その後、グループ名を「おはなしあのね」とし、受講者のうち12名が2班にわかれ、交代で月1回のおはなし会を開くことになりました。２００２年1月17日、第1回目のおはなし会を開催。約60名の親子の参加があり、うれしい出発でした。時を重ねるうちに、家庭の事情などでボランティア数も減少し、現在は4名で活動を続けています。

図書館でのおはなし会を続けながら、各自それぞれが市内の保育園や幼稚園などにおはなし会の場を広げ、また、小・中学校での朝読書の時間に読み聞かせボランティアをするなど、活動を広げてきました。活動がマンネリ化しないよう、作家さんの講演会や、ＪＰＩＣの講習会などに参加し、研鑽に努めてきましたが、最近ではメンバーの高齢化が進み、「車の運転ができるうちは」と思いながら続けている状況です。

絵本の選び方も知らず、絵本の知識の基本から学びはじめた読み聞かせの会。幼いころから絵本に接することで、子どもたちに豊かな心を育んでいってほしいと願いをこめ、続けてきましたが、反対に、私たちの方が子どもたちから豊かな心をたくさんもらえたと、感謝しているしだいです。

子どもたちの反応が活動の支え！

「第57回 全国優良読書グループ表彰」追加のお知らせ

『読書推進運動』684号(２０２４年11月15日発行号)に掲載いたしました「第57回 全国優良読書グループ表彰 一覧」に２０２４年12月13日付で広島県より推薦いただきましたグループを追加いたします。

表彰グループ名
吉舎おはなしの会 りんく

グループ所在地
広島県三次市

代表者名
福永　三和子

(敬称略)

標語決定！

2025 第67回
「こどもの読書週間」
あいことばは ヒ・ラ・ケ・ホ・ン！

2025 第79回
「読書週間」
こころとあたまの、深呼吸。

2024年12月3日㈫、公益社団法人 読書推進運動協議会の「こどもの読書週間」および「読書週間」標語選定事業委員会（出席18名）が開催され、「2025 第67回 こどもの読書週間」と「2025 第79回 読書週間」の標語が決定しました。

第67回「こどもの読書週間」標語の応募総数は一般・会員各社あわせて703点（選考対象は519点）。第79回「読書週間」標語の応募総数は804点（選考対象は597点）でした。

選定委員会では「こどもの読書週間」標語、「読書週間」標語の順で協議。どちらも、事業委員による数回の投票（第3回投票まではメールで集計）で作品を絞り、推薦の弁などを加えて、最終的に各委員の一票投票によって、入選作品を決定しました。

ご応募されたみなさん、社内の応募作をとりまとめいただいた会員各社の担当者のみなさん、ありがとうございました。

【第67回 こどもの読書週間 標語】

■入選（図書カード1万円）1点

・あいことばは
ヒ・ラ・ケ・ホ・ン！
羽鳥亜希子さん（中央社）

■次点（図書カード5千円）2点

・気になる、手にとる、読んでみる
渋谷　翼さん（中央社）

・しらないせかいにあいにいく
島　正義さん（一般・富山県）

■佳作（図書カード2千円）18点

・いきさきは、むげんだい！
・ちっちゃいあなたに
おっきな世界を届けます
・たくさん読んで、おおきくなあれ
・あのね、この本、よんでみて
・ひらこう、おはなしの扉
ほか

【第79回 読書週間 標語】

■入選（図書カード1万円）1点

・こころとあたまの、深呼吸。
磯辺　菜々さん（小学館）

■次点（図書カード5千円）2点

・心ゆさぶる、本がある。
加藤　一華さん（講談社）
・本を読む、息をのむ
中村　純さん（日販）

■佳作（図書カード2千円）22点

・明日より、
この1行先が気になるの。
・本は私の羅針盤
・今だけは、本と私だけ。
・本とわたしの化学反応
・一期一会一読書
ほか

事務局報告（12月）

☆2日＝2025こどもの読書週間・読書週間標語選定 事業委員三次投票しめきり
☆3日＝2025 こどもの読書週間・読書週間標語選定事業委員会、および全体事業委員会 開催
☆6日＝機関紙「読書推進運動」第685号入稿
・7日＝紙芝居文化の会「第7回 世界KAMISHIBAIの日」イベント出席（童心社 KAMISHIBAIホール）
☆9日＝機関紙「読書推進運動」第685号責了
・10日＝「2025 造本装幀コンクール実行委員会」出席（日本書籍出版協会）
・10日＝日本児童図書出版協会年末懇親会 出席
・11日＝「2024 図書館を使った調べる学習コンクール」個人審査会出席
・11日＝日本書店商業組合連合会懇親会 出席（帝国ホテル）
☆13日＝機関紙「読書推進運動」第685号出来
・15日＝JBBY「アート大喜利＆オンラインリレートーク」参加（オンライン）
・17日＝講談社野間四賞贈呈式・祝賀会 出席（帝国ホテル）
・23日＝「上野の森親子ブックフェスタ2025」打ちあわせ
☆28日～1月5日＝事務局休業

読書推進運動協議会
X（旧Twitter）

●編集部＆事務局のひ・と・こ・と

●新年おめでとうございます。本年もよろしくお願い申しあげます。

●昨年11月に行われた、東京子ども図書館の上映会「松岡享子～おはなしの種を蒔いた人」。この作品では、同館の「お話の講習会」の様子も紹介されているのですが、とても興味深いエピソードがありました。

●講習会では、参加者たちによるストーリーテリングの実演も行われます。はじめは、全員、自分の練習した成果を聴いてほしいという気持ちで実演に臨むのですが、会が進むにつれ（月1回、2年間にわたる講習会です！）、自分が語ることよりも、ほかの参加者の語りを聴く方に楽しみと関心が移っていく、そして、他者の語りを楽しみそこから学ぶことで、語り手としてぐっと成長していくのだそうです。

●「幼少期におはなしを楽しむ経験が、読書の基礎となる」と聞くたび、「聴くことが読むことの基礎？」といまひとつピンとこなかったのですが、なるほど、語る声、場の雰囲気などを全身で感じながら物語を楽しむ経験があってこそ、絵本の絵や文章の行間など、すみずみまで著者の声に耳を傾けて本を読むことに繋がるのだなと、ストンと納得しました。

●SNS上ではあいかわらず、過度の承認欲求や他者への思いやりにかけた投稿が話題となっています。他者のことばに耳を傾ける経験が足りないのでしょう。ストーリーテリング、読書の楽しみを広げることは、ますます大切になります。今年もご支援・ご協力をお願いします。（伸）